

外苑の雑草

みどり

○

「四つの葉ばはないかいな」

Kが口をさむのと同じ様な小聲で子供達もまねた。

梅雨には入つてからもう十日近く空は毎日ふりもせず照
りもせず、かぶさつた様にくもつてゐた。しかしバラツク
生活にとつては、雨の日も晴の日もこれ以上に苦しいので
あるから、——ことに此處の様に綠の環境を恵まれた處で
は——時は何處からか爆弾でも落ちて来ればいゝと希ふ
ほど陰鬱になる事はあつても、かうして續く曇つた日があ
りがたくも思はれた。

「先生、四つの葉ばはどうするの？」

「煮て喰べるの？」(雲雀の鳴きはじめた時分、バラツクの
人達は此邊に生えた、なづなを摘んでは食用にした) Kも

お薦のお菜に度々托児所の小母さんに、なづなのお料理を
してもらつて、野の香りが好きになつた程であつた。)

「いゝえ」

「ぢやあ、どうするの？」

「さあ、どうするのかあてゝがらん」

「しらないや」

「あのね、私のお家に母さんが病氣で、ねてゐるの、それで

もしかね、四つの葉ばが今見つかれば、なほるのよ」

「ぢやあ、あたいも探しであげようね」

「あたしも」

「ありがたう」と口の中で云ひながらKの目はぢつと草の
上におちてゐた。

「あ、あつたく、も一つ、あ二つ」

「どうれ？」

「ほうらね、一いつ二いつ三いつ四いつ、一いつ二いつ三いつ四いつ。まあよかつた、あゝうれしい、きつと吐さんの病氣がなほる事よ」Eは子供のようになう云ひながら子供の様に心からよろこんだ。

「まあよかつた。ね先生」

傍に居た△子が程たつてから、尤もらしく云つたのでは思はず笑つた、そして軽いほゝゑみが波紋のように子供達の中に傳はつて行つた。

○

海老茶色の笠のような帽子にカーキ色の服を着たお爺さん、青山外苑バラツク五十九棟の間を「チチン〜〜」と金を鳴らしながら。
「うどんちよば（蕎麥）〜〜。も一つおまけにちよば〜〜」と呼んで歩く、おひる前に一度、多方一き度まつて廻つて来る。お爺さんは大の子供好き托児所の前に来るとうどんの車をわきへ放り出して置いて托児所の窓の外にある植木鉢の棚に頬杖をつき、溶けさうな顔をして子供の養に見

とれてゐる。遊戯やゲームをしてゐる時だと、きつと終りまで見てゐて其の間はどうぞ番婆やさんと呼んでもお爺さんの耳にはは入らない。雨の日、晴れた、日暉つた日、にかゝはらずお爺さんの来る刻限は凡そ同じようであつた。托児所で未だ時計のなかつた時分、子供達はよく云つた。

「ちよば〜〜。のお爺さん來たから、もうおならび？」

と、そしてお爺さんは一人〜〜に、「さよなら」と云ふ子等を見送つてから、しづかに車を引き出して。

「も一つおまけに、ちよば〜〜」獨特の節まはしで、タヤケのバラツク村に餘音をひいて行く。

○

昔の青山練兵場、は青草の原で處々に大きな立木があつて暑い時は原を横ぎる人達が五六人づゝ、きつと樹の根に休んでゐた。そして、黒と赤との軍服が點々と廣野のあちこちに動いてゐた。

神宮造営局、繪畫館、競技場、若松やチユーリップの林そして「なんじやもんじや」と立札のある大樹の下には柵がめぐらされコツチンコツチン明けの空から入日の頃まで

石工の槌の音が響いて居り、運搬自動車や地ならしの蒸氣機械、石材を運ぶトロッコが絶え間なく動き昨年の震災後は五十九棟のバラツクや學校病院、天幕が建ち交つた、これが今の明治神宮外苑——常語には「外苑」と言ふ——である。

昔の練兵場と今の外苑にたゞ一つ變らないものがある。それは五月半ば頃から六日にかけて草原の中に可愛い頭をならべて咲くクロバアの花——子供の言ふ「白れんげ」である。

「れんげの姉さまを作るからおべべ、頂戴」

と、言はれるままに色紙を持て前の草原に出ると、かすかに甘い花の香が野の風に送られて來た、とたまらなく懐しい氣持がよせて來た。丁度K日の前に居る子供位の時に、父の好きな眞赤なネルの衣物を着て、ほくろの小母さん(口元に三つほくろがあつたので幼いEはかう呼び慣れてゐた)につれられたは、此處へ白れんげを摘みに來た事を思ひ出したので——。

蘿の燃える香、初夏の木の花の香、香に伴た過去の感じ

は、同じ香に觸れる時ざくざくと生きて自分の胸に蘇て来る。涙ぐましい氣持である。

子供達がつれて來た姉様を見ると、白いのに交つて、いかにも女の子らしい薄紅色をしたのが、いくつもある。ほくろの小母さん」に伴れられてKが來た頃は、花の白いのは稀れで大抵は、うすとき色をして今より輪も、もつと大きく背が高かつた。ただ、ほんのり甘いその香りだけは今も昔も同じものであつた。

○

托児所の小父さんは暇があると紙風船を貼つてゐた。「おぢさん、それふくらましてあけようか」遊びにあきた時、子供や私達がさういふと、「むづかしいよ、出来ますかね」と云ひながら小父さんは持ち方や吹く呼吸をしづかに教へてくれる。が小父さんのいふ通りその呼吸はなかむづかしくて、やり損じる方が多かつた。轉がしぬだ同様のバラツクの床には夏が近づくにつれて小虫が上つて來た。或時何氣なしにお茶碗を出しに行くと、棚の横板に「蟻の森へ一里」「蟻の森へ一里」と書いた紙が、一しきり毎に貼り

つけてある。「小父さん」の紙は何?」とたづねると、

「へえ、さうして置かないと蟻が上つて来ますからね」

小父さんの言葉は眞面目であつた。風船貼つて下向いて
るる白い眉が善良そのもの様であつた。

「撫で、やりたい様な氣持ね」私達は後でこんな事を云つ
た。そして子供の家の留守番を、この小父さんがしてくれ
るのを大へんうれしいと思つた。

も一人毎日おやつのお菓子を持つて來る菓子屋の小父さ
んに、
「小父さん此の頃はちつとも小僧さんが來ませんね」と聞
いたといふ。

「へい、あれがね、あなた此間、ちよいとした事で狐につ
ままれましてね、乗つて行つた自轉車を八百屋にあづけた
まゝで夜になつてから、土だらけの顔して歸つて來ました
此原はまだ狐が出ますから、先生方も夕方などはなるべく
早くお歸りになる方がよございます」小父さんの言葉には
少しも謔語なげはひは無かつた・私は二十年も前に、やつば
し此の原で、家に泊つて居た臺灣の小父さんが狐につまま

れて一夜中原を歩き廻つて翌朝歸つて來て恐しさうにはな
した話を思ひ出した、「早く歸りませうね」と云つたら「そ
の方がよろしうござります」と心から云つて菓子屋の小
父さんは歸つて行つた。
この二人の小父さんの世界、と子供の世界と。私達はせ
めて、破壊者になるまい。

會 告

七月號にお報せ致しました通り、編輯の都合上八月號
は本、九月號と合しまして倍大號として發行致しまし
た。どうぞお含み居き願ひます。